

立見淳哉(大阪市立大学商学部・大学院経営学研究科准教授)

産業集積と制度の地理学
経済調整と価値づけの装置を考える

ナカニシヤ出版 2019.3. 11, 245p.

本書は、大学院時代から現在（大阪市立大学准教授）までに取り組んできた研究成果をまとめた立見淳哉氏によるコンヴァンション経済学を軸とした産業集積研究に関する著作である。

本書のメインテーマである産業集積の背景として、1970年代から1980年代にかけて、産業集積が「再発見」され、世界の注目を集め、この傾向は今日まで続いており、伝統工芸から先端産業の拠点まで、あるいは繊維産業や自動車産業といった特定産業の集積地域から多様な産業で構成される大都市集積まで、その対象も多岐であると指摘している（本書：i）。そうした背景を受けて、本書の目的は慣行（コンヴァンション）という概念を手がかりに、産業集積の制度的な基盤を改めて捉え直し、それが経済活動に対してもつ意味を、理論的に、また経験的な研究を通じて探っていくとしている。

本書の構成は以下のとおりである。

- 第1章 産業集積論概説
- 第2章 産業集積と制度・慣行
- 第3章 コンヴァンション経済学と産業集積：
サレとストーパーの「生産の世界」論
- 第4章 知識、規範、そして「フォームへの投資」
- 第5章 産業集積の動態と関係性資産：児島
アパレル産地の「生産の世界」
- 第6章 フランスのショレ・アパレル縫製産

地の変容

第7章 パリのファッション産業における価値づけの装置

第8章 資本主義の新たな精神と豊穡化の経済：地場産業製品への価値の再付与

第1章では、産業集積をめぐる基本的な概念を紹介するとともに、経済地理学の諸潮流における本書の位置付けを示している。特に、本書における理論的立場として、制度論的経済地理学とも関係するが、むしろ関係論的地理学、さらにそのなかでも人間存在の役割を重視するアプローチであるとし、装置の背景には規範的秩序が見出され、その構築においては、人間の批判や価値判断の能力が役割を果たすと示している。

第2章では、制度論的・関係論的な議論の代表例の一つであるイノベティブ・ミリー論を取り上げ、産業集積における制度の理論的役割について検討している。第3章では、コンヴァンション経済学の理論的骨子について明らかにしたのち、そこに依拠するサレとストーパーの「生産の世界」論の展開について検討している。第4章は、第3章の議論を補完する位置づけにある。結論として、認知は人間の頭の中に存在する知識にもっぱら依拠しているだけでなく、むしろ、頭の中の知識と、外界に分散的に存在する規制や事物などのネットワークの中で行われると示している。第5章以下は、理論に基づいた実証研究の成果を表している。

第5章は、「生産の世界」論を具体的な地場産業地域（岡山県児島）の分析に適用し、生産の世界の多様性と経済調整の条件を描いている。第6章は、フランスのアパレル縫製産地であるショレ地域が、1990年代以降のアパレル

製造業の劇的衰退のなかで高級品生産へとシフトして生き残りを図ることができた要因を、制度・慣行・地理的近接性といった諸概念、ならびに「生産の世界」論を手がかりに明らかにしている。第7章は、コンヴァンション理論の立場から、パリのファッション産業を事例に、価値づけの仕組みと大都市集積の役割を明らかにしようと試みたものである。第8章は、伝統的な技術やクラフト品が近年再評価されつつある中で、産地（富山県高岡）の伝統を生かした自社ブランド商品の開発・海外市場開拓などの新しい萌芽的な試みに着目し、資本主義の変化と新たな経済の出現という、時代の大きな要請のなかで生じ、また新たな価値づけ形態によって特徴づけられていることを示している。

以上のように産業集積を改めて理論から外観し、それらを制度・慣行の視点から整理し、産業集積論とは何かを直視した極めて優れた内容である。立見氏は、評者の博士論文審査における副査をご担当いただき有益なコメントやアドバイスを頂戴するなど、これまで大変お世話になっている。特に、大阪市立大学大学院在籍時に産業集積研究の理論研究としての概念をご教示いただき、実証研究による集積地域の発展過程を説明する「論」の必要性を学んだことは大きな糧となっている。

さて、本書の特徴として実証研究をできる限り理論の枠組みに近接させ昇華しようと試みていることである。第5章から第8章までは実証研究を第4章までの理論的枠組みを用いて検証している。経験的な巡検（フィールドワーク）という手法を用いた研究は、一般的には抽象的な概念（理論）へと昇華させることは多くの研究者が悩んでいることである。しかしながら、制度・慣行を軸とした理論に落とし込み整理し

ていることは学ぶべき点が多く、今後の産業集積研究の規範となるだろう。

例えば、第2章におけるイノベティブ・ミリュー論の解説にて、都市集積の機能類型とミリューの役割について大変わかりやすく図示されており、産業集積、都市集積を思考する上で大きな視座となる。一方、こうした研究課題として「イノベティブ・ミリューあるいは制度に着目する集積研究においては、用語や概念の紹介はあってもその中身について十分な説明がなされていない。よりよく理解するためには、制度の経済学に立ち返り、制度・慣行の役割を詳細に検討する必要があるだろう」（本書：31-32）と著者は指摘している。

最後に、本書に対する要望を記させていただきたい。第5章から第8章までは実証研究にて、フランスショレ、パリ、岡山県児島、富山県高岡を各章ごとに分析・成果を表しているが、最後にまとめとして概括した内容があれば、産業集積以外の地域研究や都市政策などを学ぶ者も本書を手に取りやすくなるのではないだろうか。

いずれにしても、本書は著者の長年における研究蓄積と鋭い洞察力、国内外を問わず広い交流がもたらした最先端の産業集積研究の一冊であることは揺るぎないと言える。

（大阪経済大学経済学部教授 梅村 仁）